

双蝶々曲輪日記 引窓の段

四代 竹本越路大夫／談

高木浩志／記

〈出典『四代越路大夫の表現—文楽鑑賞の手引き—』淡交社、平成14年6月〉

好きな浄瑠璃の一つです。古^{こうつぽ}鞆^{だゆう}太夫時代の山城^{うちのししゅう}少^{せう}掾^{げん}が、弁^{べん}天^{てん}座^ざでも四ツ橋^{よつばし}文^{ぶん}楽^{らく}座^ざでも東京でも勤めておられ、その白^{しろ}湯^ゆ汲^くみでおぼえたものです。

子供心に、難しそうだけれどもやってみたくらい狂言だと思いつけていました。白湯汲みしながら、コトバがむつかしいと感じていました。厳密に言うと、コトバというより、コトバとコトバのあいだですね。思い入れなど、均一ではない微妙な間は、他にちょっと類がないとも言えます。

十代竹澤弥七君が、素人義太夫のお弟子で、『引窓』をやりたいという人がいて困っていると書いていたことがありました。つまり、三味線弾きでは、このコトバの言い方は、完全に教えきれないという意味です。いかにコトバがむつかしいかの一つの傍証といえます。

はじめて勤めたのは、新^{しん}義^ぎ座^ざ結成直後の、昭和十一年二月、二十三歳の時でした。巡業の途中、信州の飯田で、勝平時代の二代喜左衛門師匠に聞いていただきました。……ウーン、ほとんど直されなかったですねえ。完璧？ いやいや、二十三歳の浄瑠璃として判断されたということでしょう。

その頃、どんな床^{ぼん}本^{ぽん}を使っていたのか……。今あるのは、明治十四年に、かつらが書いた床本です。この床本で勤めた最初は、昭和二十九年六月の三越での三^{みつ}和^わ会^{かい}公演。忘れもしません、喜左衛門師匠に相^{あい}三^{じや}味^み線^{せん}になっていただいた、はじめての舞台でした。

六本ないし六本半の調子でやらされました。天気が良くて、湿度の低い日は、三味線の皮も湿っていませんから、もっと高く感じました。喜左衛門師匠というお方は、調^{ちやう}子^し笛^{ふえ}を持たない方でしたが、ご自分の耳の感覚だけでちゃんと合うのです。

端^は場^ばは通称『欠^{かけ}椀^{わん}』と言い、これも勤めています。まあお婆さんと嫁のおはやの、平和な普段の生活で、突然実の子の濡^{ぬれ}髪^{がみ}が来ても、別段それで乱されるわけでもなく、嬉々としています。

その実子の濡髪が、いきなり入って来た時の、「ヤア長五郎か」の「ヤア」は、なかなか言えません。思いがけずとか懐かしいとか、いろんな気持ちを「ヤア」に込めるのですが、大袈裟に言うものではなくお婆さんが自然に言うように。こういう捨^すて仮^が名^なは、むつかしいものです。結局、『引窓』は、このお婆さんの悲劇です。四人の義理の絡み合いで、その中心にいるお婆さんが語れなくては、『引窓』になりません。

おはやは、以前色町にいた女で、今は南^{なん}与^よ兵^{へい}衛^ゑの妻だが、昔の知り人濡髪が、姑の実の子と聞かされ、びっくりします。

濡髪は、追われる身ですから、それなりの肚^{はら}拵^{ごしら}えが要ります。だから、「欠椀で一杯ぎり」も、自分の行く末に対する思いを、ウレヒにかけて言いますが、まだ真実を打ち明けていま

せんから、すぐ口調を変えて、「つい食べて」になります。ここの言い方が一寸耳に残るので、この端場を『欠椀』というわけです。

濡髪は、相撲取りですから、持ち前の声大きい大夫は、得ですよ。そのままでいけるんだから。僕なんかは非力だから、太く低く拵えないと駄目です。まして二十代の頃は、相当意識して拵えないと。拵える、作る、ということは、物真似ではないが、その人物らしく聞かせる工夫です。技巧には違いないが、若い頃は表面的になりがちなのは、致し方ない所です。

切場の『引窓』になって、ヲクリの「二階へ萎れゆく」は、濡髪です。

枕の「人の出世は時知れず」、指定は地色ウクですが、他にあまり例が無いくらい独特の口捌きでの、ズバツとした言い方です。『吃又』の「ここに土佐の末弟」ともちょっと違います。

「伴ふ武士はなに者か」の「か」は、注意すべきですね。「なに者？」という疑問の間を持って、「か」なのですが、次の「所目慣れぬ血気の兩人」にすぐ続けてしまうと、「かところ」に聞こえて、それでは意味が通じません。小さく鋭く「か」、息は継ぎませんが、微妙な間をもって、別に「所」と言います。

続く「南与兵衛、いそいそとして内へ入り」の「いそいそとして」には、性別や年齢や心理状態を自然に表わす言い方として、それらに応じた決まったリズムがあります。その間に弾かれる三味線は、テツツントンツトツンという手でして、文字にはしにくいので、リズムとのみ言っておきます。改まった感じで「只今帰った」。「衣類大小下し置かれ、名も十次兵衛と親の名に改め下され、昔の通り庄屋代官を仰付けられ、七ヶ村の支配」と、口捌き良く言いますが、ですから、「人の出世は時知れず」であり、「いそいそとして」だったのです。

母と嫁とは、与兵衛の立場が変わったのだから、「今からは武士付合、遠慮が多い」と言いつつ、奥と口とに引っ込んでしまいます。

与兵衛は二人侍に、お尋者の様子を聞きます。平岡丹平と三原伝蔵の首は、直祿太郎と岩永みたいな、安手の敵役という感じです。年長の平岡のコトバは、極めてテンポが早いですが、一言一言わかるように言うのは当然のことです。口捌きの問題ですが、もう一つには、切るというか止めるところはきっちり止める。「当春」とか「此八幡近在に、由縁あって立越えた」の後などは、切ります。まあメリハリと言えるでしょう。三原のほうに音程が高く、笑い一つでも、「あハハ」とか「わハハ」ではなく「てへへへ」と笑うような人物です。

平岡と三原は二人とも、兄弟の敵の捜査を頼みに来たのだが、探す相手が、濡髪の長五郎と聞こえて、「母親障子をびっしやり、おはやは運ぶ茶碗をぐわったり」は、ドラマとして、一つの局面の転換です。二人は、ここで初めて、濡髪の現在を知るので。一方、与兵衛は、濡髪が二階に居ることもまだ知らない。

手配の人相の絵姿の話をして、土地不案内だから夜の捜査是与兵衛に任せて、二人侍が帰った後の、「おはやは終始物案じ」は、女ですが低い音です。西風のもので、こん

なところにもその特徴が顕著です。

おはやに、濡髪を捕まえるのかと尋ねられた与兵衛のコトバは、「役人^{ども}共に申付くる筈なれども」から、「搦め取って渡せ、国の誉」までは、お上から言われた通りの、役人の口調です。高く言います。「一生の外分^{がいぶん}、召取って手柄の程を見せたらば、母人にも^{きそ}嘸お悦び」というくらいですから、得意気です。最後の「嘸お悦び」は、イロなんです、ツンツンの二つ目のツンを待たずに、おはやの「イエ」を被せて言います。否定したり気が急いているような時、そういう言い方をします。「イエ」に続くおはや「何のそれがお嬉しからうぞ○なぜ」。与兵衛の「○なぜ」の前は、おはやのほうを見るような目遣いというか動きを、山城少掾もなさいました。それが、一寸考える間^まになって、「○なぜ」です。

次のおはや、「ハテ昔はともあれ」、これはすぐに言うのです。昨日までは町人だから、もし怪我でもしたら、母は喜ばないだろうと、取り繕う。与兵衛は叱る。

聞いたことも無い浄瑠璃を、家で本読みしている段階では、こんな間のあるなしは、一切わかりませんが、山城少掾の白湯汲みで言い方をおぼえておき、家に帰って床本を見ながら、間^まの意味を、子供なりにあれこれ考えたものです。

与兵衛は、以前落ちぶれていた頃、堀江の相撲や色町で、濡髪を見ていて記憶にあり、加えて人相書もあります。その絵姿を、母に見せた時、二階から覗く濡髪の影が手水鉢に写り、母とおはやと客席のみなさんはすでに知っていた事実を、与兵衛もはじめて知ります。当然、母、濡髪、与兵衛、きちんと人物を変えて。

与兵衛が二階を見上げる。おはやが引窓を閉め、室内を闇にして邪魔をする。この辺は早い運び。「内は真夜」は大きく。「灯を^ひ点して○^{あけ}上ませう」と苦肉の計。

「○ハテナ」という与兵衛の言い方は特徴的です。間^まを持って、「ハ」は息で示して、はっきり言うのは「テナ」なんです、これは普通にといいか写実に、というより、いささか演劇的なオーバーな言い方にならざるを得ません。「面白い面白い」は、二つ目のほうが、より武士的な言い方をします。おはやは、とりあえず邪魔をしたのだが、おはやが、引窓を閉めて細工した暗闇、つまり夜は、与兵衛の役目だということ。「忍びをる○お尋者」と、何かを察した言い方。

母つまり与兵衛からみると継母ですが、永代^{えいたいきょう}経を読んでもらうための来世への大事な銀で、絵姿を売ってくれと言う。実子を思う母の情^{じょう}以外の何でもないです。その気持ちになつて言うしかないでしょう。

そんなこんなで不審に思う与兵衛は、継母にその実子のことを尋ねる。不審やいたわりの気持ちが、間^まや強弱や言い方に表われます。すつとは言わない。母は、それには答えず、永代経よりも「今の思ひには替へられぬわいの」、断腸の思いで、泣きを交えて言う。ずっとコトバでのやりとりです。

母の気持ちを察して、「両腰^{りょうこし}差せば十次兵衛」は、格式張って武士、ころっと変わって「丸腰なれば」は、早く軽く町人で言います。おはや、今度は引窓を開け、まだ昼間だと言ってますから、昼は自分の担当ではないのと、丸腰の町人として人相書の絵姿を譲るわけです。

この武士と町人の言い方は、『河庄』の孫右衛門より明確です。孫右衛門は、武士は化けているだけだが、こっちは、武士も町人も両方とも本物なんだから。

母は、泣いて喜ぶ。おはやも、手柄の邪魔をしたことを、涙ながらに詫びます。「言訳なみだに」はスエ。これは継子の嫁としての継母に対する義理です。

「時移り、あはれ数そふ暮の鐘」で雰囲気を変えて。時刻移って夜。夜の詮議は与兵衛の役。与兵衛は、思案の間をほんの少し持って、「○河内^{かわち}へ越ゆる抜道は、狐川を左に取り、右へ渡って山越に、よもやそれへは行くまい」と、母とおはやに言うのですが、「右へ渡って○山越に」の二回目を一層張って言うのは、実は、二階に隠れている濡髪に聞こえるように、抜道を教えるわけで、大夫もやっぱり二階を意識して、視線を上げて言いますねえ。そして探索に出掛ける^{てい}体で様子を窺う。

すると「^{こた}塙へ兼ねたる長五郎二階より飛んで下り」と、濡髪が下りてくる。ここは三味線のツンツンツンにはめて「こたえ」と言ったり、三味線の運びと関係なく、「こた」を詰めて言ったりします。山城少掾も両方やってみました。

続く母親の長い^{ことば}詞、途中で^ち地にもなりますが、「おればかりか嫁の志、与兵衛の情まで無にしおるか」、絵姿を「売ってくれた^{その}其時の嬉しさ」、「抜道まで教へてくれた大恩」、「七十近い親持って喧嘩口論、人を殺すといふやうな、不孝な子が世にあらうか」と泣き。これまでの事実と心情をすべて並べて、最後の「せめて親への孝行に、^{のが}遁れるだけは遁れてくれ」は『新口村』の孫右衛門同様、男親も女親もない親としての気持ちです。こうしたコトバでの泣きの箇所などは、大夫によってまちまちかもしれません。計算ではないですから。僕も毎日違う。時々とっさに三味線弾きさんが手を省いたり弾いたりして、対応してくれたこともありました。人形遣いが戸惑うほどの違いではないですよ。

おはやも、逃げるよう促す。それで、目立つ^{まえがみ}前髪を剃ろうとする。捕まった時、人相を変えているのは未練がましくて不本意と思う濡髪の「一日（と食い縛って）一日と親の事が身に^し浸み（は腹から絞り出すように）、ま一度お顔が拝みたさに、お暇乞に参って（ここはやや早く）、却って思を（大きく）掛けます（泣いて）、アイヤイヤやっぱり^{このまま}此儘で与兵衛殿へお渡しなされて下さりませ」は、万感を込めてぶっつけます。結果としては、ずーと続けて言うのではなく、一語一語切れますが、但し息は切らずに。これは、母を介しての、実子の継子に対する義理です。

濡髪が、どうしても与兵衛の縄に掛かるといので、母は自害しようとする。それを見た濡髪の「^{あやま}謝りました（ツン）謝りました（ツン）謝り（ツン）謝りアア謝りました」。これなんかは、無理に変えて言おうとしなくとも、勝手に変わって聞こえるべきです。最初は思わず知らず言って、徐々に思いが加わるのですから。五回目は大きく泣く。三味線も泣きの手です。

母は、濡髪がやっと逃げるといってくれたので、相撲取りの特徴として目立つ前髪を、震える手で剃って、人相を変えるが、父譲りの^{ほくろ}黒子は、躊躇して、おはやに剃り落としてくれと頼み、二人でうじうじしている。

忍んでいた与兵衛は、門口から、「濡髪捕った」と、鋭い気合で、さっき母から受け取った絵姿の代金を顔へ投げつけ、特徴の黒子を潰す。早い運びです。金の包みには路銀と書いてある。継子の与兵衛の、継母とその実子への義理。

ほくろが取れた濡髪、「どっかと座し」と相撲取りらしく大きく。コトバ「母者人、お前のお手で縄を掛け」。「あんまり過分忝さに、母の嘆きも御意見も、不孝の罪も（テテン）思はれず」の「思はれず」は地合でマカンですし、「元服まで」も地になりますが、内容としたら、全部が長い詞です。与兵衛の義理も母の嘆きもわかるが、「四人まで人を殺した科人〇助かる筋はござりませぬ」と心からしみじみ言う。「未来の十次兵衛殿に、立ちますまいがの」と、大きく言い放つ。

母は、「よう云てくれたなあ（泣き）いかさま思へば、私は大きな義理知らず」、おはやの早いコトバ「それでは連合ひの心を無になさるる」を挟んで、母は「一旦庇うたは恩愛、今又縄を掛け渡すのは、生さぬ中の義理」と、さらりと言うが、母の、継子与兵衛への義理です。

渾身の力を込めて言うのは、母が、義理ある与兵衛の手柄のため、濡髪を捕まえようとするところ。母の「覚悟はよいか」は、断腸の思いで、イキを詰めて、腹を支えにして、一杯に押しと言うと、濡髪「待ち兼ねてをります」は、一瞬息を引いて。コトバからコトバですが、この息の引き方も大問題。母と子の情愛として、大事なところと思ってやってきました。

この浄瑠璃は、とにかくこうした四人の義理の絡み合いですね。絶えず誰かが誰かの立場や心情を本心から思いやる、表面的にすらすらとは言えん、態とらしくかたり押しつけがましくてもいかん。だから、はじめに申し上げたように、コトバの間に象徴される言い方がとても難しいのです。文字と文字との間の思いが、どれだけ伝えられるか、です。中でも、母親が一番むつかしい。

このあとは、与兵衛が颯爽としてます。濡髪を縛った引窓の縄を切ると、月の光りが差し込んで明るくなる、もう夜が明けたから、自分の役目はすんだという。濡髪を逃がそうとするわけです。これは、継母とその実子への義理。

大夫は、あえて申しますと、もう節の通り三味線に乗って言っていればよいようなものです。さらさらと足も早いです、口捌き良く。

「明くれば即ち放生会、生けるを放す所の法、恩に被ずとも勝手においきゃれ」と与兵衛。母とおはやは喜ぶ。濡髪は、落ちてゆく。

……昨今の、都会のマンション住まいの人、昔の家の“引窓”を御存知でしょうかなあ。再三大事な役目を果たしていますが、その意味がわからないと……。それ以上には、義理ということ。義理と人情との柵、そのドラマですね。